

**Contents** \*\*\*\*\*

特集：年初に考える 2023 年の地政学リスク	1p
＜海外報道ウォッチ＞	
「2023 年の米国政治はどう動くか」	6p
＜From the Editor＞ 年末年始の見聞から	8p

\*\*\*\*\*

**特集：年初に考える 2023 年の地政学リスク**

明けましておめでとうございます。今年最初の「溜池通信」をお届けします。

年初には、ユーラシアグループの”Top Risks”が話題になります。2023 年版はやや印象が薄いですが、それでもいろいろ考えさせられる内容でした。世界は多様な問題に満ちていて、ビジネスの現場から見れば悩ましいことばかり。なかでも昨年始まったウクライナ戦争は、やはり歴史的にも重い事件だったのだなということを実感しています。

本号では、年末年始に読んださまざまな材料を取り上げつつ、「ビジネス界から見た 2023 年の地政学リスク」について考えてみたいと思います。もちろん明快な答えは見当たらず、それでも先の見えない時代においては、ない知恵を絞ってみるしかありません。いやはや、まことに厄介な年の始まりであります。

**●今年の”Top Risks 2023”は「失敗作」なのか？**

年初恒例、ユーラシアグループの”Top Risks 2023”が公表された<sup>1</sup>。今年の「10 大リスク」のラインナップは下記の通りである。

- |                                |              |
|--------------------------------|--------------|
| (1) Rogue Russia               | ならず者国家ロシア    |
| (2) Maximum Xi                 | 「絶対的権力者」習近平  |
| (3) Weapons of mass disruption | 「大混乱生成兵器」    |
| (4) Inflation shockwaves       | インフレーションショック |
| (5) Iran in a corner           | 追い詰められるイラン   |
| (6) Energy crunch              | エネルギー危機      |

<sup>1</sup> <https://www.eurasiagroup.net/issues/top-risks-2023>

- (7) Arrested global development 世界的発展の急停止
- (8) Divided States of America 分断国家アメリカ
- (9) Tik Tok boom Tik Tok な Z 世代
- (10) Water stress 逼迫する水問題

\* Red herrings : Cracks in support for Ukraine/EU political dysfunction/Taiwan crisis/Texh Tit-For-Tatt

\* リスクもどき : ウクライナ支援に亀裂 / 機能不全化する EU / 台湾危機 / 技術をめぐる米中報復合戦

長らくこの「10 大リスク」を見てきた者としては、「今年はパッとしないなあ」の感が否めない。このラインナップ、たぶん年末には忘れられているのではないだろうか。

昨年のランキングは、第 1 位に”No Zero Covid” (中国のゼロ・コロナ政策) を挙げていた。その後の展開、特に昨年末からの抗議運動と急激な締め付け解除、その後の感染急拡大に至る経緯を考えれば、まことに卓見と言うべきであった。その一方で、誰もが注目する「米中新冷戦」を Red herrings にする、という大胆さも光るところであった。

2021 年のランキングでは、第 1 位は”46\*”であった。第 46 代合衆国大統領に就任したジョー・バイデン氏の選挙結果が信用されていない、という指摘であったが、実際に発表の 2 日後には「1月6日」の事件が起きている。米連邦議会が「現職大統領の扇動」によって暴徒に襲撃される、という衝撃的な事件であった。

そういった過去の Top Risks に比べると、2023 年版は遺憾ながら精彩を欠く。素人目にも、「こんなの、みんな知ってることだよ」と言われてしまいそうだ。

思うにユーラシアグループの「Top Risks」は、企業経営者向けに毎年の国際情勢を考えるヒントを与えてくれる点に値打ちがある。どうやら日本企業が大きな顧客になっているらしく、今年も HP には早々と日本語版がアップされている。考えてみれば、「年初に 10 大リスクを発表する」というフォーマット自体がきわめて日本的であり、どこか「初詣のおみくじ」的などところがある。

それでもユーラシアグループは、「経済脳」の人たちに「安保脳」の世界を案内してくれる「通訳」として機能してきた。端的に言えば「マネーの世界」の住人には、「パワーの世界」のことがよくわからない。だから毎年のように、「まさかこんなことになるとは…」ということが繰り返される。特に Brexit とトランプ大統領誕生の 2016 年以降は、そのことが強く意識されるようになってきた。

ところが昨年は、ウクライナでとうとう「本物の戦争」が始まってしまった。しかもその後の対ロシア制裁が大規模なものとなり、本当に世界経済や企業経営に困難をもたらすようになってきている。ユーラシアグループが発足して今年で 25 年。とうとう時代に追い越されてしまい、「次に示すべき知見」に事欠くようになっていないだろうか。

## ●現実主義、合理主義者が躓くとき

「現実主義者が誤りを冒すのは、相手も現実を直視すれば自分と同じように考えるだろうから、馬鹿な真似はしないにちがいない、と判断した時である」。

上はニコロ・マキャベリが発し、それを塩野七生氏が日本の読者向けに紹介した言葉である<sup>2</sup>。かかる名言が残っているということは、マキャベリが生きたルネサンスの時代にも、「まさかこんなことが……?!」ということが少なくなかったからに違いない。

「現実主義者」を「ビジネスパーソン」に置き換えてもいい。ビジネスの世界に棲息しているのは、概ね現実的で合理的な人たちである。ときどき不合理に見える人（例えばイーロン・マスク氏）もいるが、テロリストのような無茶をするわけではない。また、他人から不合理に見える行為が、実は良く出来た戦略であることも少なくない。よくできた企業戦略はさまざまな「逆説」を含んでいて、だからこそ他社が真似をしない（その間に大差がついてしまう）という面もあるからだ。ともあれビジネスの世界で成功するのは、概ね現実主義者であり合理主義者たちである。

「マネーの世界」においては、「命までは取られない」とか「失敗してもやり直せばいい」といった常識が通用する。ところが一步外へ出て「パワーの世界」へ行くと、こちらでは不合理なことが本当に起きてしまう。しかも人の命が懸かっている、やり直しがきかないことが多い。2022年は、そのことをつくづく痛感させられる年であった。

昨年末、ワシントンポスト紙のジョージ・ウィルのコラム、「How Russia's invasion of Ukraine altered the world in 2022」（2022年のロシアによるウクライナ侵攻は世界をどう変えたか）を読んでいて、思わず膝を叩いたくらいがあった<sup>3</sup>。

過去 250 年間の地政学上の最も壮大な失敗のうち 3 つは、ロシアが関係したものである。

①210年前のナポレオンの侵攻、②129年後のヒトラーの侵攻、それから③81年後のロシアのウクライナ侵攻である。

ナポレオンやヒトラーがそうであったように、プーチンも壮大な勘違いをやらしたようである。地政学上の歴史的な大失敗に、なぜロシアが関係してくるのかはわからない。あまりにも広大な国土が、権力者の判断を狂わせるのであろうか。

とりあえずわれわれは、「1 世紀に 1 度クラス」の地政学的なイベントに直面しているようである。そしてナポレオンとヒトラーが敗れ去った後の世界は、敵も味方も大いなる混乱に見舞われたわけであるから、今回もたぶんそれに近い結果になるのであろう。

<sup>2</sup> さらに安田佐和子氏（ストリート・インサイト代表）が筆者に思い出させてくれた。多謝。

<sup>3</sup> <https://www.washingtonpost.com/opinions/2022/12/28/russia-ukraine-invasion-2022-change/>

## ●つまるどころプーチンの「判断力」が鍵になる

それではプーチン大統領は何を間違えたのか。

年末年始に、小泉悠『ウクライナ戦争』（ちくま新書）を読んだ。昨年2月24日に始まったこの戦争をめぐる経緯を振り返る好著である。ただし小泉氏は「第2次ロシア・ウクライナ戦争」（本書における正式名称）がなぜ起きたのか、という問題には踏み込んでいない。プーチン氏の頭の中を覗くことはできないのだから、それは当然であろう。

それでも本書を読んで心に残ったのは、「チェーホフの『桜の園』の女地主ラネフスカヤのように「かつての超大国にしてスラヴ世界の盟主であった過去を忘れられない現在のロシア」（P173）という一節であった。だからこそ彼らは、民族主義的優越感のもとに、「ウクライナ人は（軍が、ではなく）弱い」と考えてしまったのではないか（P112）。今回の戦争の本質は、つまるどころその辺にあるように思えてならない。

前述のジョージ・ウィルのコラムも、バツサリと斬り捨てている。

「プーチンはロシアが強大な国家であること、ウクライナは国家ではなく地理的な呼称であることを主張した。ところがその結果、ロシアはイタリアやテキサスよりも経済規模が小さく、その権威主義的な文化もあいまって、実態以上に印象が悪いことを示した」

そうだとすると、ウクライナ侵攻は現実味も合理性もない、まったく情緒的な判断であったということになる。これが「マネーの世界」であれば損害を出し、会社をつぶす程度で済むが、「パワーの世界」においては人が死に、どうかすると国が亡ぶ。そのことはめぐりめぐって、「マネーの世界」にも被害を及ぼすことになるだろう。

それではこれから先のロシアはどうなるのか。これがまったく困ったことに、プーチン大統領の判断力を当てにするしかないのである（あんな間違いをやらかしたのに！）。

本誌の昨年6月10日号「ロシアへの愛をこめて～ウクライナ戦後への思考実験」で書いた通り、この戦争の結果がどうなったとしても、確実にロシアに残るものが以下の4点である。これらがある限り、他国がロシアを軍事的に制圧することは不可能である。ロシアは「守りの絶対王者」であるから、最後は交渉で戦争を終わらせるしかないのである。

- \* 広大な国土（地球上の陸地面積の6分の1を占める）
- \* 地下資源（ただし効果的に使えるかどうかは不明）
- \* 安保理常任理事国ステータス（拒否権はなくなるらない）
- \* 膨大な量の核兵器（戦術核の使用は既に検討済みの様子）

ビジネス界にとってひとつだけ間違いないのは、2023年は昨年を引き続き「現実主義と合理主義」に信を置き過ぎてはいけないということであろう。

## ●2022年に生じたポジティブな出来事

と、ここまで考えた上で”Top Risks 2023”の序文を読み返してみると、なかなか味わい深いことが書いてある。

大きな問題のひとつは、少数の個人が桁外れに大きな力を持ち、透明性のない中で限られた情報をもとに地政学的に重大な決定を下していることだ。地政学において、こうした動きはグローバルな統合への流れと対極に位置するもので、今日の世界の不確実性を増大させている。

今年のトップリスクの上位、「ならずもの国家ロシア」「『絶対的権力者』習近平」「追い詰められたイラン」などは、いずれも独裁体制が行き詰まりを見せながら、さらに強固になっているという図式に共通点がある。

これに対し、民主主義陣営は正しく立ち向かえるかと言えば、米国の指導力はまだまだ覚束ないものがある。しかも米国は、かつてのように民主主義を輸出するどころか、民主主義を弱体化させるツール（AIやSNSなど）の最大の輸出国となっている。

こんな面白い問いかけも行われている。今日の世界は、古典的な戦争という19世紀的な挑戦のみならず、ハイテク分野においては21世紀的な挑戦も受けているのである。

AIにより超富豪となった者たちは、世界を不安定化させる点でプーチンや習近平より大きな脅威なのだろうか？ 答えはまだ不明だが、真つ当な疑問といえる。

それでも”Top Risks 2023”の序文は、昨年起きた以下のようなポジティブな変化も指摘している。確かにその通りで、ビジネスパーソンの美徳は楽観的であることのはず。2023年もまた、以下のような変化が持続することを祈りたい。

- \* パンデミックは（ほぼ）脱した。
- \* ロシアはウクライナで勝利できない。
- \* EUはかつてないほど強力になっている。
- \* NATOはみずからの存在意義を再発見した。
- \* G7は強化されつつある。
- \* 再生可能エネルギーは非常に安価になっている。
- \* 米国のハードパワーは依然として他の追随を許さない。
- \* 米国では中間選挙が極めて正常に行われた。
- \* ドナルド・トランプ前大統領は大統領就任以来最も弱体化している。

## <海外報道ウォッチ>

2023年の米国政治はどう動くのか

(観察対象：The Cook Political Report <https://www.cookpolitical.com/>)

第118米連邦議会は、年初から異例の展開となった。本来、1月3日の招集日に決まるべき下院議長がなかなか決まらず、最終的には1月7日未明、15回目の投票でようやく決定した。ただしそのためにケビン・マッカーシー議員は、共和党右派のフリーダム・コーカスの妥協を得るために、「議長解任手続きの簡素化」など一連のルール変更に応じざるを得なかった。ことによると、史上最弱の下院議長が誕生したのかもしれない。

今年の米国政治がどう動くのか、本誌がかねてからネタ元としている「クック・ポリティカル・レポート」の年初の記事を参考にしてみよう。

まずチャーリー・クック氏の見解から。議会招集の前日に書かれた”**2023 May Look an Awful Lot Like 2022**” (2023年は22年のような不穏の予感)にはこんな記述がある。

\*昨年はロー対ウェイド判決が半世紀ぶりにひっくり返り、FBIが前大統領の家宅捜索を行い、中間選挙では驚くべき結果がもたらされた。今年はトランプ前大統領が複数の罪で起訴される可能性があり、なおかつ大統領選候補に残るのかどうか。その場合、誰が挑戦するのか、そのことはバイデン大統領の2期目の判断に影響するのかなどが問われよう。

\*目下のドラマは下院共和党の議長選である。マッカーシーは強い抵抗に遭っており、トップの座に就く確率は5割より低そうだ。ただし魅力的な代替案もない。反乱分子が要求するルール変更に応じていて、それは日付のない辞表に署名して政敵に渡すに等しい。

\*いずれにせよ、下院共和党は「政権を担当できない」という批判を招きかねないし、両党の上院議員から「下院は真のプレイヤーではない」と子供扱いされるかもしれない。

前任のナンシー・ペロシー議長は超強力な指導力を発揮したものだが、今年の下院は荒れ模様となる。下院民主党の新たなリーダーとなったハシム・ジェフリーズ院内総務は、「向こう2年間、米国民は過激なMAGA共和党の人質にされてしまう」と非難している。23年度予算がまだ成立しておらず、この夏には債務上限問題も到来することを考えると、まことにごもつとも。ちなみに新下院議長は、「債務上限を上げる際には歳出削減を必要とする」とのルールでも妥協した模様。クック氏はこのコラムを、”It will be fun to watch, as part of this second wild and crazy year in a row” (2年連続のワイルドでクレイジーな年を見守るのも一興だろう)の一文で締めている。諦念なのか、自棄気味なのか。

同社で相方を務めるエイミー・ウォルター氏の1月5日付寄稿が、これに輪をかけて面白い。題して”**The Republicans’ Math Problem in Midterms and Potentially 2024**” (共和党の算数問題は中間選挙、そして24年選挙にも)。マッカーシー氏が下院の過半数を取れないことよりも、共和党はさらに悩ましい算数の問題を抱えているという。

\*民主党系選挙参謀のポットホーザー氏は、「トランプは我々の側により多くの票を回してくれる」と言う。2016年以降に誕生した「新有権者」は約4000万人いて、彼らは必ずしも民主党支持ではないが「反MAGA」である。彼らが投票してくれれば民主党は勝てる。

\*それ以前の中間選挙（2014年）で有権者は白人が多く、共和党寄りだった。「新有権者」がいなければ、昨年のアリゾナ、ジョージア、ネバダで民主党は負けていた。

\*2024年選挙も民主党が有利だ。2016年にトランプはアリゾナ、ジョージア、ミシガン、ペンシルバニア、ウィスコンシンの5州を制した。ところが現在5人の州知事中4人、10人の上院議員中8人が民主党である。そして5州とも2020年にはバイデンが勝っている。また16年に投票せず、18年と20年に投票した有権者は26p差でバイデン支持である。

\*それでは今回の下院の騒動はどうか。下院が機能不全に陥れば陥るほど、民主党は「新有権者」に対し、今度の選挙は投票せねばと説得しやすくなる。共和党内でもデサンティス知事がトランプを倒す場合、MAGAの脅威を訴えることが効果的になるかもしれない。

こうしてみると、トランプ氏が生み出した「MAGA」ブームは、いよいよ自壊過程に入ったように思える。昨年の中間選挙においても、「いくら何でもこれはないだろう」という共和党候補者が多く破れ去った。今まで投票に行かなかった無党派層約4000万人が、て「反MAGA投票」をしているという分析は興味深い。彼ら「新有権者」をいかに説得するかが、今後の米国政治において重要性を増すだろう（デサンティス氏も含めて！）。

「MAGA20」と呼ばれる共和党の20人の保守強硬派議員たちは、2日目にトランプ前大統領が「撃ち方止め！」を勧告しても言うことを聞かなかった。トランプ氏の面目がつぶれたのみならず、議会に対する前大統領の「恐怖の支配」も薄れつつあるようだ。

こんな「学級崩壊」状態の議会が延々と続いたら、共和党に対する有権者の信頼は失墜するだろうし、海外からの米民主主義への疑問も深まるばかり。しかるに「MAGA20」の議員たちは、いずれ劣らぬレッドステーツを選挙区としており、落選の恐怖もさほど働かない。もとより上院は民主党が多数なので、来年いっぱいまで法案は通りにくくなっている。となれば下院は遠慮なく、「コップの中の嵐」を続けることができそうだ。

こんな風に考えると、今年の米国政治では、政府閉鎖や債務上限問題に伴う米国債のデフォルトリスクも排除できないということになる。それはさすがに願い下げだが、実際にそうなったときに「誰の責任か」は非常に明確だと言えるだろう。

歴史上に登場する多くの「過激派」は、現実の壁に敗れることによってさらに過激さを増し、結果的に没落を早めていくものである。1970年代の連合赤軍事件がその典型で、暴力行為や内ゲバが表沙汰になることで、加速度的に国民の支持を失っていった。

ということで、マッカーシー新下院議長の指導力には期待しいが、彼が「MAGA20」議員の標的となったことで、時代の変化を一步進める役割を果たすのかもしれない。

## <From the Editor> 年末年始の見聞から

2023 年が始まって既に約 2 週間。今日は日米首脳会談も行われるということで、世の中は既にフルスピードで動いている感がありますね。

ここでは年末年始の見聞の中から、心に残ったことをいくつかご紹介します。

ひとつは富山に向かう北陸新幹線の車内で、スノーボードを持つ若者を見かけたこと。瞬間、あの巨大な物体は何ごとかと思いましたが。確かに見覚えはあるのだが、あまりにも久しぶりなので、すぐには見当がつかない。おそらくはこの 2 年間、スノボは家の中でほこりをかぶっていたのでしょう。今年の JR 東日本のポスターには『冬を取り戻すんだ』とある。「行動制限のない年末年始」を楽しんだ若者は、全国で大勢いたことと思います。日本経済は着実に「平常への回帰」に向かいつつあると思います。

次に 1 月 5 日の時事通信社新年互礼会。筆者がこの会に呼ばれるのは 3 年ぶりですが、各界の著名人が集まっておられました。遠慮がちなながら立食パーティーも復活していて、久々に食べる帝国ホテルのローストビーフはさすがに美味でありました。

ところが残念なことは、壇上に立つ岸田文雄首相以下のお歴々の挨拶がつまらない。皆さん「紙」を読まれるのです。以前の安倍首相や小泉首相は、巧みなパーティートークで会場を大いに沸かせたものなのですが。長らくパーティーを自粛している間に、この国のパーティー文化は劣化してしまった模様。こちらは再生に時間がかかりそうです。

それからもう一点。休み中に柏駅前のキネマ旬報シアターで映画『長全寺』を見てきました。この映画、ちょっとめずらしいですぞ<sup>4</sup>。なにしろ柏市でしか上映しておりません。

長全寺は、柏駅東口から徒歩 5 分の場所にある曹洞宗のお寺です。歴史は古いらしいけれども、街になじんだごくフツーのお寺が映画の舞台になっている。それも「説法頭巾」というヒーローを擁するお寺で、「ほぼすべて柏市内で撮影」とか。なんなんだそれは。

どうやら地元の酔狂な方々が、勢い余ってクラウドファンディングで作ってしまったらしい。おそるべきカルト映画なのか、『翔んで埼玉』のようなご当地ネタなのか、ことによると『カメラを止めるな!』のような低予算映画の傑作かもしれない。新作料金 1900 円（幸いにも筆者はシニア割 1200 円）を払って観に行くべきか、少々迷うところです。

結論から言えば、意外にちゃんとした映画でした。テレビ東京の深夜枠コンテンツなどに比べれば、ずっとまともです。冒頭シーンは江戸時代ですが、旧吉田家という市内の古民家で撮っているらしく、俳優たちの「殺陣」も本格的である。いや、よかった。これなら「大学生の自主製作映画じゃねえぞ！」などと客席から怒号が飛ぶことはない。

有名な俳優さんは一人も出てこないのが、登場人物の顔を覚えにくいのが難点けれども、「説法頭巾」はファッションナブルだし、単なるヒーローものではなく、修行中の僧侶たちの苦悩も垣間見えてくる。それからエキストラで登場する檀家の皆さんは、どう見てもホンモノの檀家の皆さんですな。低予算映画はまさにかくあるべし。

---

<sup>4</sup> 予告編はこちらをご参照。 <https://www.47engine.com/>

ただし観終わった後に、「この映画は、いったい誰に何をさせたかったのか？」と少々首をひねりましたな。本物のお寺さんを相手にしているから、あんまり悪ふざけをするわけにもいかず、「落ち」がいまひとつ。勸善懲悪の話になっているけれども、「悪」がしょぼ過ぎる。それから、過去と現在を行き来する設定もわかりにくかった。採点するならば、地元であるという点をオマケして、ぎりぎり☆3つといったところでしょうか。

それにしても人口 40 万人程度の都市は日本中に数々あれど、「市内だけで映画が撮れてしまう」ところは多くはないでしょう。幸いにも柏市は、そういうエネルギーを有する街であるようです。この休みには『流山がすごい』（大西康之／新潮新書）も読んだのですが、『柏市もすごい』と強調したいところです。

\* 次号は 1 月 27 日（金）にお届けします。

編集者敬白

---

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記あてにお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>  
双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-mail: [yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com](mailto:yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com)